



筑紫女学園大学リポジット

国語科教育「書くこと」実践の現在 : 全国学力調査 中学校問題Bへの対応を切り口として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 出雲, 俊江, IZUMO, Toshie メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/271

国語科教育「書くこと」実践の現在

—全国学力調査 中学校問題Bへの対応を切り口として—

出 雲 俊 江

Current Practice in the Education of “Writing” in Japanese —Focusing on the Problem of National Assessment of Academic Ability in Japan—

Toshie IZUMO

0. はじめに

2007年から文部科学省による全国学力・学習状況調査がほぼ毎年実施されている。全国の小学校六年生及び中学校三年生を対象とし、結果公表やその影響についてなどが話題になることが多い。学校現場は、結果公表の有無にかかわらず、否応なく評価に曝される。畢竟日頃の実践においても、調査の得点向上を視野に入れた取り組みが行われることになる。

この全国学力・学習状況調査のうち、主として「活用」を問うものとされる国語Bは、意見や説明などの自由記述問題を含むもので、これまで現場で行われてきた伝統的な国語の試験のあり方とは、少々趣を異にしている。例年これらの記述問題の正答率が低く、また無回答率が高いことが指摘されている。

国語Bの内容は、「話すこと・聞くこと」「読むこと」にまたがり、さまざまな複合的な力を問おうとするものではあるが、本論では特に中学校国語Bのうち、文章を記述する形での問いをとりあげ、「書くこと」指導の観点から考察を行いたい。また、そこから見える国語科教育における「書くこと」指導の現在について考察したい。

1. 全国学力・学習状況調査 中学国語 B問題について

全国学力・学習調査は、大きく「教科に関する調査」と「質問紙調査」の二つに分かれており、「教科に関する調査」の実施教科は、国語・算数・数学の2教科（2012年度は理科も）である。

また、「教科に関する調査」は、各教科それぞれ「知識」「活用」の二種類に分かれている。

国立教育政策研究所ホームページは、「教科に関する調査」の「知識」「活用」について、以下のよう

・出題内容：「知識」と「活用」の2種類の問題を出題

○（主として「知識」）…国語A，算数・数学A

身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や，実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能などを中心とした出題

○（主として「活用」）…国語B，算数・数学B

知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や，様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などにかかわる内容を中心とした出題

「活用」にあたる国語Bは、これまで現場で行われてきた伝統的な国語の試験のあり方とは、少々趣の異なる記述式の問題を含むものである。それは、課題文から自分の考えや感じたことの自由記述、随意に例を挙げて説明するなど、回答者によって内容に違いがおこることを前提とした問いの形である。例えば本年平成25年度実施の問題では、大問3問それぞれに文章で答える問題があり、そこでは提示される条件のもと、自分の疑問について調べる方法や、自由な感想、説明を工夫して答えるなどの形で、20～50字、100字以内、110字などで答えることが求められている。この形式は、おおむね毎年同様である。この問題Bの3問のうちの記述式問題にあたる問三では、無回答率が高く、また正答率も低い場合が多い。

問題の実際を見てみよう。平成25年度のB問題は、大きくは①～③の3問。それぞれ以下のようなものである。

①は、「いろはかるた」などのかるたについての文章及び挿絵を読んでから答える問題である。問一、二で、文章の内容や構成に関する問いについて選択肢から答えた後、問三が文章による記述問題である。問三は以下の通り（実際は縦書き）。

三 この文章を読んで「かるた」について分かったことの中から、興味をもったことについてさらに調べることにしました。次のア、イ、ウについて、それぞれの指示に従って書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり、行間に書き加えたりしてもかまいません。

ア この文章を読んで、「かるた」について分かったことを一つ書きなさい。

イ アについて、さらに調べたいことを一つ書きなさい。

ウ イを調べる手段を、次の①から③までの中から一つ選び（どの〈調べる手段〉を選んでもかまいません。）、その手段を用いて〈どのようにして情報を集めるのか〉を二十字以上、五十字以内で書きなさい。

なお、「③ その他」を選んだ場合は、あなたの考える調べる手段を解答用紙の（ ）に書きなさい。

〈調べる手段〉

①学校図書館 ②インターネット ③その他

②は、星新一「装置の時代」を読んで、その内容についての問い一、二に答えた後、三の記述問題である。三の問題文は以下の通り（実際は縦書き）。

三 この文章を読んで、あなたが感じたことや考えたことを、次の条件1から条件3にしたがって書きなさい。

なお、読み返して、文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 本文を引用して書くこと。引用する部分は、かぎかっこ（「 」）でくくること。

条件2 この文章について、あなたが感じたことや考えたことを具体的に書くこと。

条件3 八十字以上、百字以内で書くこと。

③は、新聞記事と資料を読んで答える問題である。問一、二は選択肢で答える問題。問三が記述問題である。三の問題文は以下の通り（実際は縦書き）。

三 【新聞記事】を読んだり【資料】をまとめたりした小川さんは、間違えやすい漢字を取り上げ、学習する際の注意点やコツを中学一年生に説明することにしました。あなたならどのように説明しますか。〈間違えやすい漢字の例〉を次のA、Bから一つ選び、（どちらを選んでもかまいません）、それを学習する際の注意点やコツをあとの条件1から条件3にしたがって書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり、行間に書き加えたりしてもかまいません。

〈間違えやすい漢字の例〉

A 拾・捨

B 厚・熱

条件1 選んだ〈間違えやすい漢字の例〉について、二つの漢字の共通点や相違点など漢字の特徴を取り上げて書くこと。

条件2 条件1に応じて、二つの漢字を学習する際の注意点やコツを具体的に書くこと。

条件3 七十字以上、百十字以内で書くこと。

特に上に示した各問の問三の記述式問題では、無回答率が高く、また正答率も低い場合が多い。以下の表は、「平成24年度全国学力・学習状況調査における福岡県での学力学習状況調査結果報告書」から、中学国語Bについてのものである。24年度の問題も25年度の問題とほぼ同様の形式である。これを見ると、三にあたる内容の問題は、無回答率が高く、正答率も低いことがわかる。

■ 福岡県中学校国語B 設問別正答率

設問番号	設問の概要	出題の趣旨	福岡県 (公立)		全国(公立)	
			正答率 (%)	無解答率 (%)	正答率 (%)	無解答率 (%)
1一	対談での発言の役割について説明したものとして適切なものを選択する	相手の話を踏まえて話す	78.4	0.3	79.2	0.4
1二	対談の展開を整理したものとして適切なものを選択する	話の展開に注意して聞く	80.3	0.3	80.8	0.4
1三	これからどのような言葉の使い方をしたいのかを具体的な言葉の例を挙げて書く	相手の発言を注意して聞き、自分の考えを書く	25.7	13.2	19.7	13.9
2一	「被写体」を言い換えている言葉を本文中から抜き出す	文脈の中における語句の意味を捉える	83.3	5.9	84.3	4.9
2二	祖母向けの説明書の工夫として適切なものを選択する	効果的に伝わるように、内容や表現の仕方を工夫して書く	82.0	0.5	82.5	0.5
2三	祖母向けの説明書の一部を書く	資料に書かれている情報の中から必要な内容を選び、伝えたい事柄が明確に伝わるように書く	67.7	8.2	68.4	8.1
3一	物語について説明したものとして適切なものを選択する	物語の展開や表現の特徴を捉える	60.8	0.8	61.6	0.8
3二	物語に描かれている季節を選択する	物語の場面の展開を捉える	31.1	0.7	34.2	0.7
3三	朗読の仕方の工夫とその理由を書く	物語の内容や登場人物の言動の意味などを捉え、自分の考えを書く	63.7	14.0	58.9	13.6

調査実施者である国立教育政策研究所は、このような傾向について以下のように述べている。

4年間を通して一般的にB問題の正答率が低いことについて、記述式問題に課題があると分析するだけでは十分ではない。生徒の日常生活、社会生活に関連した具体的な言語活動を設定し、目的に応じて知識・技能を活用させる授業を行っているかという問題意識をもつことが大切である。個々の設問の解答結果に基づいて生徒の学習の状況を捉え、主としてA問題で問われている知識・技能とともに、思考力・判断力・表現力をも育成する授業作りに本調査結果を役立てることが重要である。

(「全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ 児童

ここではB問題は克服すべき課題としてあげられている。現場は当然、B問題の特に記述式問題克服のための実践という課題に直面することになる。ではそのためにどのような実践を行うべきだろうか。

上に挙げた部分で、課題克服の方策として示されているのは、「生徒の日常生活、社会生活に関連した具体的な言語活動」の設定、「目的に応じて知識・技能を活用させる授業」である。同ホームページの「授業のアイデア」でも、B問題によく似た内容の授業提案がなされている。現場においても、B問題に類似の日常生活の場面をとり入れた学習が多く行われているのが現状であろう。

2. 国語B 記述式問題が前提とする作文のスタイル

国語Bは「活用」に分類されていることもあり、生徒に求められる言語能力としては、「日常生活において、場面場面での必要に応じて」、「目的や相手に応じて」、などといったものが印象的である。しかしそれらは求められる言語能力の応用例としての表面の部分にすぎない。ここでは、国語Bの記述式問題が暗黙の前提としているものに目を向けて考察を行う。

改めて、B問題の特に記述式問題における課題克服のために、どのような実践を行うべきかという現場の直面する課題について考えてみたい。

渡辺雅子（2004）は、初等教育における作文指導の目指すものが、日本とアメリカでは大きく異なっていることに気づき、そのあり方を、時系列作文と因果律作文という二つのスタイルに分類した。

日本で多く行われているとされたのが、時系列作文である。出来事を起こった順番に述べるスタイルである。一方アメリカで多く行われているのは、因果律作文である。評価を最初に述べ、そこから以前の出来事を振り返ってみるスタイルである。二つの違いは、順番の違いとなって表れる。

本書には、次のような4コマ漫画を用いた実験が記されている。

自由課題の絵と説明文（四コマ漫画の課題）

どちらかに○をして下さい。男・女 生まれた年と月：昭和 年 月

絵を見て書く作文
けんた君は小学生です。テレビゲームと野球をするのが大好きです。けんた君は野球チームのエースピッチャーで、毎週土よう日の朝早く野球のしあいをします。下の絵はけんた君の一日のでき事をえがいています。けんた君にとってその日がどんな日だったか、書いて下さい。（書く前にまず四つの絵をすべて見てから書き始めて下さい。）



以下は、この実験での二つの代表的な作文の例である。

・時系列作文の例

けんた君はねないでテレビゲームをしていてそしたらあいじかんまえになってしまっていていそいでユニホームにきがえバスにのったところまちがえてそしてあいじかんまにあわなくてせんばつでピッチャーができませんでした。

・因果律作文の例（日本語訳）

私のジョンの一日に対する意見は、一日の始めから終わりまで彼はイライラした一日を過ごしたということです。その日は彼にとってとても皮肉な日でした。まず彼はビデオゲームを長くやり過ぎたので、それが悪い出来事の連鎖反応を引き起こしたのです。彼は遅く起きたので精神的にパニック状態になり、実際それが間違ったバスに乗る原因となり、それが野球の練習に遅れる原因になったのです。概して言えば、彼は悪い一日を過ごしました。*1

因果律作文では、結果から、その原因となった事柄の選択が行われている。一連の出来事全体を階層的に統合する枠組みを作る形式である。それに対し、日本人児童の作文は、一つのコマから一つのコマへとつながっていく時間的な連鎖そのものが構造原理になっている。

次に、渡辺氏が示した作文の二つのスタイルを念頭に、B問題を見てみる。25年度B問題①の三の記述問題は、ア、イといった小問によって、先に結論を述べておいてから、その理由や内容について述べる形式となっており、暗に因果律作文が求められている。②は自由に感想を述べる形式であるが、あえて言えば根拠を具体的に示すことが求められている。③もあらかじめ例を選択してから、説明をすることを求められている。

あらためてB問題対策として示した先述のホームページ「これからの「書くこと」における学習のポイント」を見てみよう。

自分の意見や考えに説得力をもたせるためには、中心となる主張を明確にすることとともに、図や表、統計や調査のデータなど具体的な資料を有効に活用して主張の裏付けとなる根拠を示すことが大切である。授業においては、取り上げる資料が、自分の主張を裏付けるための材料として適切であるか、根拠として使用する上で信頼できるものかといった点について検討、判断させ、目的に応じて適切に使い分けさせることが大切である。その上で、根拠となる事柄を具体的かつ正確に取り上げながら自分の考えを書くように指導することが重要である。（下線出雲）

これからの「書くこと」として求められているのは、主張したい内容に応じて根拠を示すという点で明らかに因果律による作文である。

学習指導要領の求める「書くこと」も同様である。学習指導要領の「書くこと」が目標とする表現の形式も、日本の伝統的な著述スタイルである時系列でなく、おおむね因果律作文の形である。以下は「中学校学習指導要領」国語 各学年の目標及び内容 より 第3学年「B 書くこと」の内容である。（下線部は、因果律作文ということを意識してみれば、特に重要と思われる内容である。）

B 書くこと

(1) 書くことの能力を育成するため、次の事項について指導する。

ア 社会生活の中から課題を決め、取材を繰り返しながら自分の考えを深めるとともに、文章の形態を選択して適切な構成を工夫すること。

イ 論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書くこと。

ウ 書いた文章を読み返し、文章全体を整えること。

エ 書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、ものの見方や考え方を深めること。

ここまで見てきたように、B問題の記述問題は、結論先行型の因果律による作文スタイルを前提としている。課題としてのB問題の記述問題を克服するための実践としては、まず基本的な因果律作文の形式を理解し、練習することが必要であり、有効である。実際内田伸子らによる研究で、結論先行型の作文指導を行うことによってB問題の得点が高まるということが報告されている*2。

3. 国語B 記述式問題が前提とする生徒

次に無回答者を減らすためには、どのような力をつけるべきかについて考える。

P4の表に見るように、B問題3問のうち、それぞれ問一、二の、選択肢で答える読み取りの問題は、記述問題に比べ正答率が高く、無回答率も低い。このことは、資料の読み取り力の不足が三の低迷の直接の原因では無いことを示している。記述問題の無回答率が高いのは、多くの現場の先生が感じておられるとおり、おそらく、言語技術の問題以前に生徒が「すくむ」ことであると思われる。

そこで、先に示した平成25年度 国語Bにおいて、生徒はどのような存在として前提されているかという観点から問題を見直してみることにした。

①では、回答者の生徒は、かるたについて「分かる」主体、「調べたい」と考える主体、「調べる手段と方法を考える」主体である。

②では、与えられた文章を読んで、自由に感じたり考えたりする主体である。

③では、下級生に対し、間違いやすい漢字の例をA、Bから選んで、学習する際の注意点やコツを説明する主体である。

これらの問題において回答者としての生徒は、すでに自身で立場や目的、方法を選び取る言わば‘自立した個’として位置づけられていると言える。

B問題は、学習指導要領「B 書くこと」で提示された言語活動例「イ 図表などを用いた説明や記録の文章を書くこと。」(第1学年)、「イ 多様な考えができる事柄について、立場を決めて意見を述べる文章を書くこと。」(第2学年)、「イ 目的に応じて様々な文章などを集め、工夫して編集すること。」(第3学年)などに対応している。学習指導要領における学習者もまた、自立した個として位置づけられた存在である。

次にB問題に答える過程で、生徒の中で起こることについて考えてみたい。

たとえば、問題①では、ア「分かったこと」イ「アについて調べたいこと」ウ「調べる手段」を問われている。

アの「分かった」の主体は生徒自身である。アでは、自分の体験としての「分かった」を、「分かったこと」として対象化してとり出し、記述しなくてはならない。次にイでは、そこから自分が「調べたい」と思えることがらについて書くことになる。「調べたい」ことはアの「分かった」ことにつながっていれば何でもよい。しかし、考えてみればその‘何でもよい、自分が「調べたい」ことを自由に書く’というのは、案外と勇気があることである。ここで生徒に求められているのは、言わば自分の内面を書くことであるからである。学力が低く、そのため自己評価も低くなりがちな生徒にとっては、自分で考えたこと、感じたことを書いて示すことそれ自体に抵抗がある。

では、B問題の記述式問題の正答者は、個が確立された学習者であるかといえばそうでもない。

①の三の場合、上のように、本当に「調べたい」と思う場合もあるかも知れないが、多くの場合そうではないだろう。当然のことだが、文章を読んで「分かった」「調べたい」として取り出し可能な内容のうち、ウの「調べる手段」として思い当たることを選んで書くのが正解にたどり着きやすい。この時の生徒は回答に都合のよい「調べたい」「分かった」を選んで回答として示しているのである。比較的学力の高い生徒にとっては、回答に際して、このような手続きが行われていると思われる。この時生徒は問題に答えるために、仮に「調べたい」や「分かった」者となって答えている。これは状況を見ながら正答する力があるということであり、一人の個としての生徒自身の答えではない。

無回答率を下げるためには、まずは「すくむ」ことを無くしてゆくとりくみが行われるべきである。そのためには、読解や記述の方法など、言語技術的な意味での力をつけることもさることながら、日々の実践の中で自分で考えたこと、感じたことを書いてよいのだという基本的な安心感や自信をつけさせることが必要であると考ええる。またこのことは、状況を見ながら正答する力のある生徒にとっても必要であると考ええる。

例え話をしよう。特別支援学級における、‘自動販売機でジュースを買う’学習の実践での話である。

練習を重ねて出来るようになったので、いよいよ生徒が一人で自動販売機に買いに行くことになり皆で送り出したのだが、なかなか帰ってこない。あんまり遅いので見に行ってみると、当該生徒は、どのジュースを買ったらよいのか決められずに立ちすくんでいた。

買う方法は教えられるけれど、自分が欲しいジュースは、他の人が教えることは出来ない。上の正答者の例は、書き方を知っていることを示すために書くのであり、これは、欲しくないジュースを買ってみせることである。試験に対応する力という点では必要だが、日々の実践として繰り返すのは良くない。

4. 生徒を支える「書くこと」の指導

書くことの指導には、戦後の学習指導要領が重視してきた社会的通じ合い軸にした文章表現力の育成の側面と、生活綴方教育が重視してきた認識力や自己表現力の育成の側面の両面がある。

大正期以降、戦前、戦後を通じて、我が国の「書くこと」の学習指導の中心的実践として行われてきたのが、生活綴方である。児童が主体的に、自身の日常生活に目を向け、自分で見たものをありのままに書くという生活綴方の基本原理は、大正期の芦田恵之介の随意選題に始まる児童の自由作文、雑誌「赤い鳥」綴方などを通じて確立され、その後の生活綴方においても一貫している。

生活綴方の特徴のうち、現在の学習指導要領の「書くこと」についての内容や活動例の示すあり方と異なる点をあげると、大きくは次の二点であろうか。

- ・生徒自身が見たことや体験したことを書くこと
- ・書くことそのものが目的であること

生活綴方の作文は、ほぼ全部が時系列作文である。時系列作文の営みとは、日常生活の中で、自分自身の目に映ったものを、大切に拾いながら、書くことによって認識を確かにしてゆくことである。そのような営みによって、ようやく、自分自身の書きたいことを自分で決めることの出来る個といったものが少しずつ表れると考える。

生活綴方実践のもつこれらの特徴は、書くことや文集にして読み合うことによっても、生徒自身の認識形成や自己確立を支えるものとして機能していたと考えられる。

一方現行学習指導要領の「書くこと」の目標は、「目的や意図に応じ、日常生活にかかわることなどについての確に書く能力を身につけさせるとともに、進んで文章を書いて考えをまとめようとする態度を育てる。」(傍点 筆者)とあり、生活綴方教育が重視してきた認識力や自己表現力、人間形成の側面については積極的には記されていない。教科書における「書くこと」の実践も、多くはすでに確立された個としての学習者にとっての、方法学習を示すものとなっている。

現場における日々の実践としては、最終的に求められている因果律的作文の練習を焦るばかりでなく、いろいろな場面で時系列的作文の機会を設け、因果律作文を書くための前提となる個を形成することが必要である。たとえばいわゆる遠足作文といった、学校行事の後の作文や生活ノートの意義について、「書くこと」の観点から見直し、取り組みを深める必要があるだろう。

5. まとめ

全国学力・学習状況調査の国語の問題のうち、「活用」を問うとされる国語Bの記述問題は、正答率が低く、無回答率が高いことが課題とされている。この課題の克服のため、実践現場において必要とされる日々の実践について考察し、またそれを通じて、「書くこと」指導の現在について考えることとした。

「書くこと」の学習指導には、大きく分けて以下のような二つの側面があるといえる。一つは、書き方を教えることと、一つは、書くべきことを自分でみつけることを教えることである。

まず、正答率の向上のためには、因果律による作文スタイル、すなわち結論先行型の作文スタイルを身に付けることが必要である。B問題の記述問題が前提としているのは、結論先行型の作文であり、その学びの中で論理的な思考力を身に付けることによって、正答率の向上に結びつくことが報告されている。

次に無回答の生徒について、その原因は、多くの実践者が指摘する「すくむ」ことにあると思われる。「すくむ」ことの克服のためには、生徒に、自分で考えたこと、感じたことを書いてよいのだという基本的な安心感や自信をつけさせること、また、書くことによって自己の認識を確かにしてゆかせることなどが必要である。これらは、生活綴り方実践が目指してきたことである。無回答生徒への対応としてだけでなく、生徒自身の認識形成や自己確立を支えるものとしての「書くこと」に目を向けるべきである。伝統的な時系列作文スタイルの意義について見直し、日々の実践における継続的な取り組みとして取り入れることに大きな意味があると考えている。

【注】

*1 渡辺雅子『納得の構造 一日米初等教育に見る思考表現のスタイル』（2004 東洋館出版社）P. 19

*2 内田伸子・鹿毛正治・河野順子・熊本大学教育学部附属小学校『対話で広がる子どもの学び—授業で論理力を育てる試み—』（明治図書2012）

【参考文献】

井上尚美・尾木和英・河野庸介・安芸高田市立向原小学校（編）『思考力を育てる「論理科」の試み』（明治図書2008）

内田伸子「基礎研究・実践研究において留意すべきこと～「統制群」の発想が不可欠～」(全国大学国語教育学会広島大会シンポジウム提案 2013. 10. 26)

国立教育政策研究所「平成25年度全国学力・学習状況調査 調査問題・正答例・解説資料について」(国立教育政策研究所ホームページ)

同上「平成24年度」以前

全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』（2013 学芸図書）

福岡県教育委員会「平成24年度 全国学力・学習状況調査における福岡県での学力・学習状況調査」(国語・算数・数学・理科・質問紙) 調査結果報告書(平成24年12月)

森田信義「表現教育の研究」(『新訂国語科教育学の基礎』2010 溪水社)

渡辺雅子『納得の構造 一日米初等教育に見る思考表現のスタイル』（2004 東洋館出版社）

(いづも としえ：日本語・日本文学科 准教授)